2025 年 ISTSS 年次総会（ボルチモア）を振り返って

ソラヤ・シーダット（Soraya Seedat）MD, PhD
2024–2025 年度 ISTSS 会長

第 41 回 ISTSS 年次大会は、2025 年 9 月 17 日から 20 日にかけて、ボルチモア・マリオット・ウォーターフロントで開催されました。この大会は、科学的探究と仲間たちのつながりの勝利でした。私たちを資金の制約や倫理的ジレンマ、感情的負荷、そして多様な異なる視点の中で支え続けてくれるのは、このつながりなのです。4 日間にわたり、私たちは研究者、臨床家、支援者、トラウマサバイバー、長年学会を支えてくださった退任メンバー、そして学生として集いました。その多様な立場を超えて、私たちは「世界中のトラウマティック・ストレスを理解し、癒し、予防する」という共通の使命に結ばれていました。大会のテーマである「トラウマティック・ストレスの最前線：グローバルな視点と創造的な解決策（*Frontiers in Traumatic Stress: Global Perspectives and Creative Solutions*）」は、私たちにとって羅針盤であると同時に、挑戦への招待状でもありました。すなわち、既存の枠を越え、学際的な連携を深め、トラウマと回復の分野に新しい創造性をもたらすよう促したのです。テーマにある「創造的な解決策（creative solutions）」という言葉は、決して単なるレトリックではありませんでした。私たちは、方法論の革新、デジタルヘルスの活用、政策・地域社会・メディアなどを横断するセクター間の連携、そしてトラウマ科学を公衆衛生・教育・社会システムの変革へと橋渡しする研究を目の当たりにしました。しかし、私にとって今回の年次大会で最も印象的だったのは、そうした学術的成果以上に、仲間としての連帯感と、目には見えない精神性――温かさ、相互への敬意、支え合い、そして共に前進しようとする力を感じたことでした。

9 月 20 日（土）、大会を後にしたとき、私の胸にはさまざまな感情が入り混じっていました。誇り、感謝、安堵、懐かしさ、そして一抹の寂しさです。ISTSS の会長として務めさせていただいたことは、私のキャリアの中でも最も大きな喜びのひとつでした。会長としての任期を終えるというのは、決して静かな時間ではありません。それはまるで、過去と未来をつなぐ蝶番のような位置に立つことです。過去の歩みを振り返りながら、これまでに成し遂げたこと、まだ成し遂げられなかったこと、そしてこれから取り組むべきことを考え続ける――。その両方の世界を行き来しながら、つなぎ続けるような忙しくも責任ある時間でした。任期を通して、私は常に自らの限界と、学会への希望の双方を感じていました。この責任は決して一人のものではなく、執行委員会や理事会とともに担ってきた共同の使命でもあります。年次大会での別れ

の場面には名残惜しさがあり、まるでこの空間とエネルギーを手放す準備がまだできていないような気持ちでした。ISTSS の会長には、明確なビジョンと外交的な調整力、そして信頼性が求められます。一方で、耳を傾け、柔軟に対応し、学会の多様なニーズに応えていくことも欠かせません。この一年、私はしばしば自分の小ささを感じる瞬間もありましたが、ISTSS のメンバーが示してくださった献身と連帯の力に何度も支えられました。

今回のプログラムは、「基礎研究から臨床実践へ（bench to bedside）」という研究と臨床をつなぐ橋渡しにとどまらず、地域社会、文化への敬意と学びの姿勢、政策、正義、そしてグローバルなトラウマに焦点を当てたセッションも含まれていました。低・中所得国や、紛争や避難の状況下で活動する研究者や臨床家たちも力強い存在感を示していました。各セッションでは、厳密な実証研究、基礎と臨床をつなぐトランスレーショナル・リサーチ、臨床試験、実装科学、文化的および社会的正義に焦点を当てた研究、そしてとりわけ資源の限られた環境での実践的取り組みが紹介されました。私が特に印象的だったのは、科学的・臨床的・社会的・文化的・政治的といった多様な視点が意図的に統合されていたことです。多くの参加者が、「要旨や発表の水準が非常に高かった」と口をそろえていました。表彰や感謝の場面は、いつもながら温かく、学会の連帯と感謝の精神を感じさせるものでした。ポスター発表者たちはその場に立ち、積極的に対話を交わし（パネルの裏に隠れることなく）、これらのセッションを生きた交流の場に変えていました。また、特別関心グループ（SIG）も活発に会合を開き、意見交換を行い、セッションを支援し、将来の共同研究の種をまいていました。この大会は、専門家としての学びを深めるための多くの機会にも恵まれていました。プレミーティング・インスティテュート（事前研修会）、スキル向上のためのワークショップ、そして若手や次世代を支えるための交流や支援の機会が設けられました。舞台裏での運営は見事でした。年次大会委員会の共同委員長であるニダ・コリー博士とジャクリーン・ウォマーズリー博士をはじめ、プログラムの副担当者や査読者、ISTSS 事務局のスタッフ、そして「ISTSS オーケストラの指揮者」とも言えるダイアン・エルモア・ボルボン博士（事務局長）の尽力に深く感謝いたします。運営面では、スケジュール調整、会場割り当て、案内表示、講演者との調整、受付や登録の流れ、全体的なコミュニケーションまで、すべてが円滑に進みました。 大規模な会議にありがちな小さなトラブルが起こった際にも、迅速かつ的確に対応されていました。また、コーヒーブレイクや開会レセプション、ポスター・レセプションなど、参加者が自然に交流できるような温かい工夫も随所にありました。プログラムの流れを妨げることなく、参加者が互いに語り合い、つながりを深めることができる時間が巧みに組み込まれていたのです。夜のイベントでは、参加者同士が集い、語り合い、旧交を温める時間もありました。いま、多くの職業的交流がオンラインやリモートで行われる時代において、仲間と直接顔を合わせる機会は本当に貴重です。抱擁を交わし、廊下での即興的な会話を楽しみ、コーヒーを飲みながら語り合い、進行中のプロジェクトの近況を伝え合う――。そうした一つひとつの小さな瞬間が、私たちの仕事が本質的に「人とのつながり」を中心に据えた営みであることを、改めて思い出させてくれました。

この年次大会は、次世代育成と包摂性の推進という明確な目的も掲げていました。学生部門のリーダーであるキャメロン・プガッチ博士とジェシリン・フロイリッヒ氏が企画したセッションは、研修生や若手研究者のために特別に設計されたもので、ワークショップ、学生ランチ会、主任研究者（PI）とのネットワーキング・フェア、インターンシップおよびポスドク・プログラム・フェアなど、多様な学びと交流の場が提供されました。会場には、新しい声が歓迎され、発表者と参加者の双方から新鮮なエネルギーが感じられました。多くの方々が「この会議を開いてくれてありがとう」と声をかけてくださり、その一人ひとりの言葉が深く心に残っています。ポスター会場で、コーヒーを手にしたひととき、あるいはセッションの合間に――直接お話しくださった皆さまに、心から感謝申し上げます。遠方から、また近隣からこの大会に参加してくださった会員の皆さまへの感謝の印として、年次大会の全セッション録画（Annual Meeting proceedings）を参加者の皆さまに無料で公開しています。さらに、地政学的な状況などの理由で米国への渡航が難しかった方々や、個人的な判断で参加を見合わせた会員の皆さまにも学びの機会を広げるため、録画を割引価格で提供しています。ISTSS の国際的な広がりを支える取り組みとして、年間を通じて、そして年次大会期間中にも翻訳活動をリードしてくださった大江美佐里先生、ジョンボスコ・チカ・チュクウォルジ博士、柳田（中島）多美先生に深く感謝申し上げます。また、舞台裏で献身的に支えてくださったボランティア翻訳者の皆さま――ナディア・ラモス、イスマエル・オテロ、ミゲル・アリアガダ、スサナ・カンポス、カロリーナ・サルガド、テレサ・レジェス、カロリーナ・ゴンサレス、カミラ・エスピノーサ、フアン・カルロス・オリベロス、パウラ・アルボルノス、カミラ・アセベド、ローズ・ウォン――その真摯な努力と温かい協働に、心から敬意を表します。

この任期を通じて、私は多くの学びを得ました。使命の明確さがいかに重要であるか、誠実なコミュニケーションと透明性が信頼を築くこと、そして耳を傾ける姿勢の大切さを改めて実感しました。また、組織の継続性を保つためには、引き継ぎや記録、そして組織としての記憶を守り伝えていくことが欠かせないと感じました。何よりも、私たちの分野において希望と前向きな姿勢を保ち続けることの重要性を深く学びました。この場をお借りして、執行委員会（EC）、理事会、事務局スタッフ、年次大会の運営チーム、各委員会や特別関心グループ（SIG）のリーダー、ボランティアの皆さま、そして参加し、尽力し、知恵を分かち合ってくださったすべての会員の皆さまに、心より感謝申し上げます。この一年間には、複雑な意思決定や優先順位の調整、そしてすべての学会が直面する制約との向き合いなど、さまざまな挑戦がありました。しかし、ISTSS 事務局や執行委員会、理事会の献身的な支え、そして会員の皆さま一人ひとりの努力と寛大さによって、そのすべてを乗り越えることができました。ボルチモアでの年次大会は、ISTSS がいかに強靭で、創造的で、再生力に満ちた学会であるかを改めて示す場となりました。新しいリーダーたちが次々に台頭し、会場には未来へのエネルギーが満ちあふれていました。ISTSS は次の章に向けて確かな地盤を築いており、新会長のアンドレア・フェ

ルプス博士が、このバトンを卓越性と誠実さ、思慮深さ、そして勇気をもって引き継がれることを、私は強く確信しています。

　これからの ISTSS には、多くの希望と同時に、取り組むべき課題もあります。本稿を『Stress Points』への最後の寄稿とするにあたり、特に重要だと感じている点をいくつかお伝えしたいと思います。第一に、閉鎖性に陥らないことです。資源の限られた地域、歴史的に周縁化されてきたコミュニティ、そして従来の学問領域の枠を超えた分野からの声を、これからも確実に包摂し、支援し、中心に据えていく必要があります。第二に、次世代の育成と支援です。若い研究者や臨床家が単に知識を受け取るだけでなく、自ら創り出し、発信できるよう、能力形成（capacity building）を支える取り組みをさらに強化することが求められます。また、次世代のメンバーが年次大会に参加できるよう、資金的な支援の仕組みを整えることも大切です。第三に、トラウマの複雑性を正面から受け止める**こと**です。その複雑さを学問と実践の中心に据え、厳密さと謙虚さを両立させながら探求を続ける必要があります。新しいパラダイムや方法論、新しい声に対して、常に開かれた姿勢を持ち続けることが求められます。第四に、学会としての持続可能性と財政的基盤の強化です。グローバルな学会としての使命を果たすために、財政の健全性を保ちながら、会員資格や年次大会への参加の障壁を取り除く努力を続けていく必要があります。私は今後、ISTSS 収益委員会（Revenue Committee）の新委員長として、これらの取り組みを引き続き支援してまいります。いま、ISTSS には新しいリーダーが次々と現れ、若手会員たちが情熱をもって前へ進み出ています。そして、学会のグローバルな広がりはこれまでになく拡大しています。ISTSS は、さらに明るく力強い未来へと確実に歩みを進めています。